近江の文人画家

文人画は南画といわれることもあります。それは中国で明・清という時代に文人画を南宋画といったことによります。

文人画は中国では士大夫階層（官僚知識人）が描いた絵画をいいます。専門の職業画家の絵画と区別して、文人（知識人）の余技的な絵画をさしていわれたものです。それだけに精神性の高い画境のものが多いといえます。

わが国に文人画が積極的に紹介されて描かれるようになるのは江戸時代の中頃からであります。祇園南海（1677～1751）や柳澤淇園（1706～58）といった武家階層の漢学者が、当時、唯一の海外へ窓を開いていた長崎から輸入された絵画の手本（画譜類）や作品から学んで描いたことによるといわれています。それは主に中国の清時代の画譜や文人画でした。

南海や淇園につづいて18世紀後半において、日本の文人画を大成したのが、池大雅（1723～76）と与謝蕪村（1716～83）です。

大雅や蕪村のほかに彼らにつづく文人画家に浦上玉堂（1745～1820）、田能村竹田（1777～1835）、頼山陽（1780～1832）などがあり、文人画は江戸時代後期から明治時代にかけて、儒者、僧侶、医師、商家などの知識人の間で盛んになって行きます。

さて、近江の文人画家ということになると、近江に生まれるか、近江の地に住んで名のあった画家ということになります。そのほかに加えるならば、近江に往来した画家も含めることができると考えられます。

近江の文人画家というと、まず、紀楳亭（1734～1810）、横井金谷（1761～1832）の名をあげることができます。そのほか岡笠山（生没未詳、栗太郡治田村目川生まれ）の名を加えることができます。いずれも与謝蕪村の画系につらなる画人です。

蕪村は俳聖松尾芭蕉に強く引かれ、芭蕉の孫弟子にあたる早野巴人（1677～1742）に師事し、独自な俳風を確立した人で俳人として有名な人であります。しかし、画家としても池大雅とともに文人画の大成者といわれ、中国の明・清時代の文人画を研究して独自の文人画様式をつくりあげました。

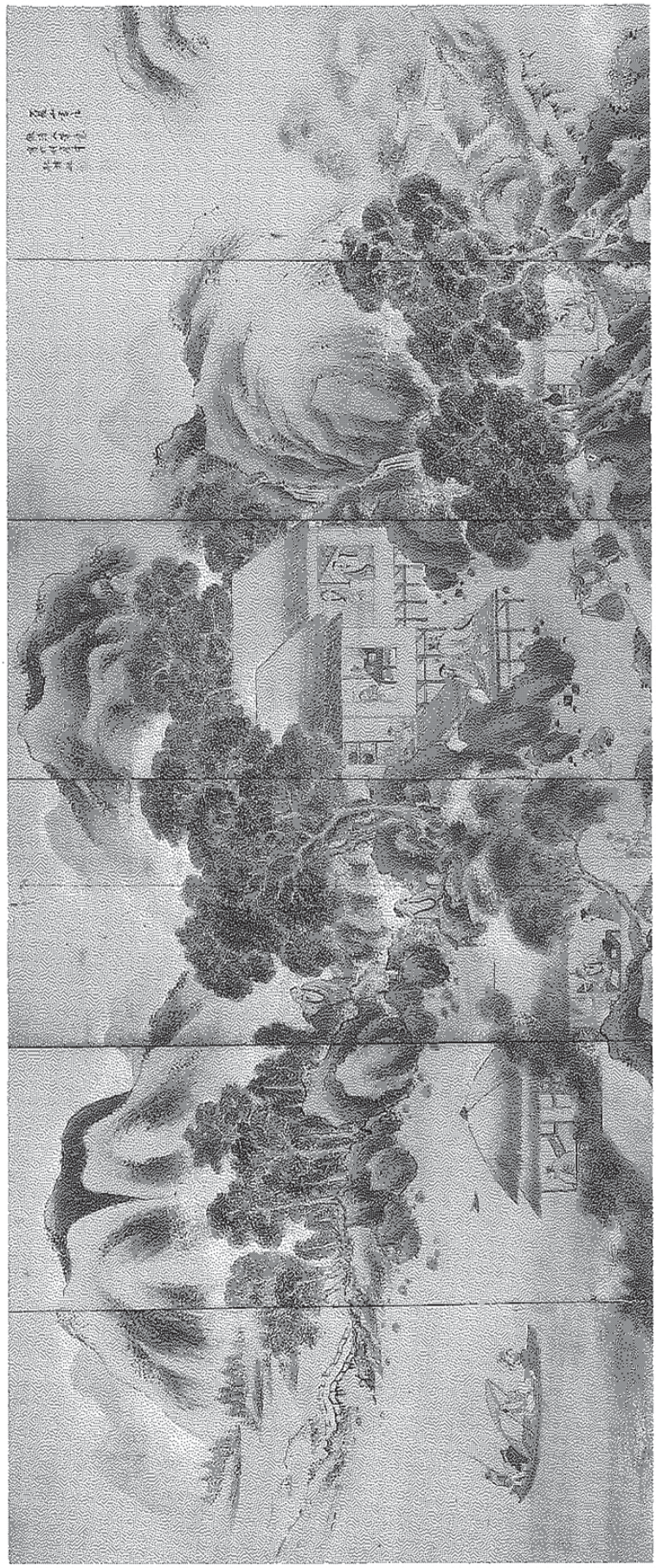
蕪村の門下には高井几董、江森月居といった俳諧の門人、松村月渓（呉春）、紀楳亭といった文人画の門人がいましたが、師匠の蕪村のように俳諧、文人画の双方にすぐれた才能を発揮するような門人は育たなかったようです。

蕪村様式の文人画を直接師事して受けついだ門人に松村月渓や紀楳亭がいます。また、蕪村の画や人柄に私淑した画家に横井金谷や岡笠山がいます。月渓はのちに円山応挙について京都四条派の祖となります。

近江ゆかりの文人画家として、まず紀楳亭について見ることにします。

紀楳亭は大津蕪村とか近江蕪村といわれていました。その筆法は楳亭独自のものもありましたが、多くは師の蕪村の忠実な継承であります。彼は山城国鳥羽に生まれたとされていますが、出身についてはもう一つはっきりとしていません。生年についても墓碑銘にある没年、文化７年、77歳から逆算して、享保19年としています。

紀楳亭は梅亭と書くこともありますが、名



「夏山書屋図」6曲1双　紙本著色　紀　楳亭　筆（50歳代の制作）　149.5cm×341.6cm

は時敏、字は子恵、楳亭はその号で、ほかに九老山人、九老山樵とも称していました。

若い頃から蕪村について画を学んだようです。修行時代師匠と同じく中国の文人画に倣って画を描いた時期には、巖郁、羅美といった難しい号を用いたこともあります。九老とか湖南九老と署名した作品は大津へ移住した後に描かれたものです。

1783年（天明３）、12月25日、蕪村は67歳の生涯を京都で閉じますが、楳亭は松村月渓とともに枕元にあって、師の最期をみとっています。

楳亭が大津へ移住したのは1788年（天明８）のこととされます。この年、京都に大火があり、その難にあって大津へ来ました。大津は蕪村のあこがれていた芭蕉ゆかりの地でもあり、自然風光の美しいところでもあります。そんなこともあって楳亭は湖国の住人となります。楳亭の大津移住には一人の人物がかかわっています。それは大津石川町長寿寺の住職であった龍賀（1745～1812）という人です。龍賀も蕪村の門人で、若いころは皐鶴、鵬溟といった文人気どりの難しい雅号を用いていましたが、後は龍賀と称していました。

楳亭の画集であります『九老画譜』の出版にあたっても龍賀がその跋文を書いていることからも二人の間柄がしのばれます。

大津はびわ湖の南端に位置して、風光明媚なところであり、

「蓬萊群仙図」 紙本著色　紀　楳亭 筆(1805・文化２年)　96.3cm×127.1cm

湖水を利用して、北国の物資が集積される港としても知られていました。そんなところから、各藩の蔵屋敷が湖岸に建ち並び、米と両替を商いとする裕富な町人も育っていました。

楳亭が大津へ来たのは55歳の時で、住居は鍵屋町（現在の長等三丁目）の中村五兵衛の借家でした。貸主の五兵衛は六代目で、俳諧を良くし、龍賀などとも風流の仲間であったと思われます。両替商等を営んでいた、これらの人たちが楳亭を迎え入れたように、大津を訪ねる文人墨客を受け入れる支援者層であったと考えられます。

龍賀の寺であった長寿寺の過去帳によりますと、楳亭は妻の袖と娘さとを伴って来ましたが、さとを大津に来た翌年に、袖を楳亭が67歳の時に失っていることがわかります。

大津にいた楳亭は通称を立花屋九兵衛といっていたようです。それに因んで九老と号し、大津に在住ということで「湖南九老」とよく署名をしています。

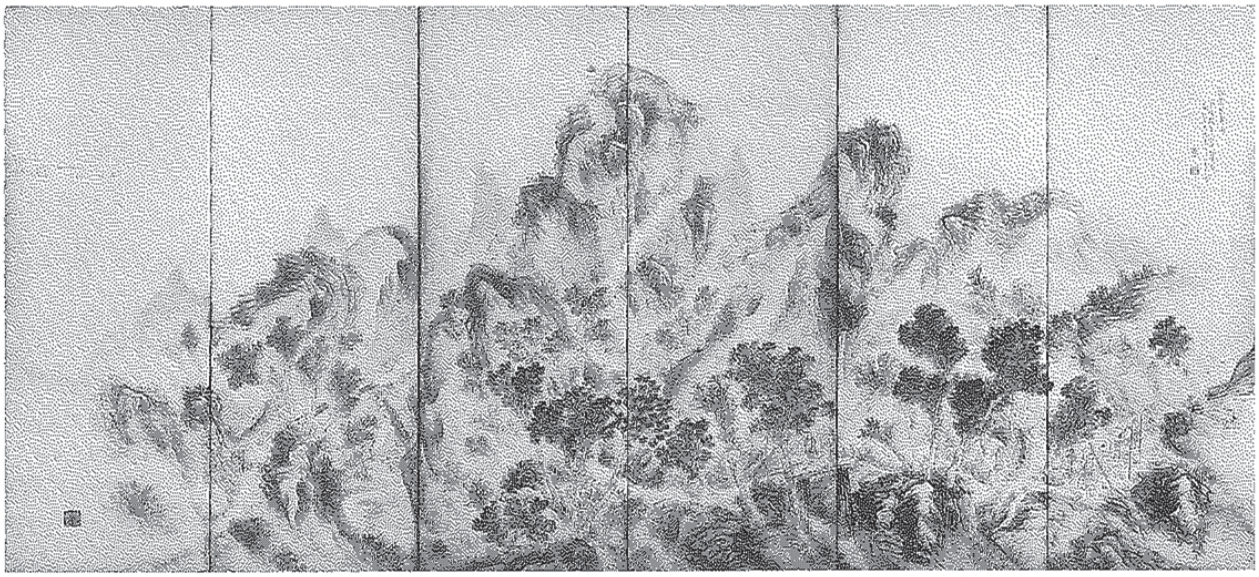
楳亭の画は山水画を多く残していますが、しゃれた俳画や羅漢さんなどの道釈人物画、動物画などであり、時には注文者の好みによるのか美人画も描いています。楳亭の画業については厳しい批評・毒舌をもって知られる文人画家田能村竹田（1777～1835）が『山中人饒舌』の上巻で評しています。それは68歳になった楳亭を大津に訪ねた折のことであります。それによると、楳亭は文人画家として本来持つべき高雅な精神を持ち、老齢ながらも、倦むことなく作画を続け、その筆法は枯れて奥深いものである、としています。

大津の支援者に愛され、楳亭はこの地に22年間を過し、文化７年７月７日、77歳の生涯を終えています。墓は小関越のかかり、等正寺の近くの共同墓地にあります。

次に蕪村に私淑して、多くの文人画を残した画家として横井金谷をあげることができます。

金谷には自叙伝『金谷上人御一代記』７巻

左隻



「吉野熊野真景図」6曲1双　紙本墨画・淡彩　横井金谷 筆(1806・文化3年)　各166.0cm×363.0cm　右隻

があります。現在は写本の形で数本伝えられています。なかなかユーモアに富んだ内容で、早くから世に知られ、藤森成吉により『太陽の子』という小説で紹介されたり、一代記については、書かれた本も数冊あります。したがって、金谷の場合は画家としてよりも、『御一代記』の主人公金谷上人の方が良く知られていました。『御一代記』は縦が27センチに、横は仮に7巻をつなげると73メートルになるもので、金谷が自分の個性豊かな生きざまを面白く綴ったもので、挿画も自分で描いたようです。この『一代記』は72歳の生涯を持った金谷の誕生から45歳までの一代記であります。史実にそった部分もあれば、創作や他人の旅行記から引用したところもあるようです。それによりますと、金谷は栗太郡笠逢村（現在の草津市下笠町）に生まれ、幼少のころ大阪の浄土宗寺院の小僧となっています。その後江戸の芝僧上寺で修行し、21歳の時、京都北野にあった金谷山極楽寺の住職となります。それ以降、山号から、自らの雅号を金谷とし、ほぼ生涯にわたって用いています。

金谷はその残された作品から、蕪村に私淑して蕪村の作品を臨摸したもの、蕪村の作品

を基礎に改作したようなものなども多くあります。中には蕪村に似て非なるものもあり、金谷独自の画風の山水画も沢山見られます。

文人画家になる以前の金谷の作品は簡単な俳画と浄土宗関係の仏画が主なものでした。

金谷の僧名は奏誉妙憧（そうよみょうどう）といいますが、一ヵ所に留まることが少なく、多くは旅にあった人です。それゆえ金谷は放浪の画家と呼ばれています。浄土僧としても、宗祖であります法然上人の生涯を描いた「円光大師絵詞」や「山越阿弥陀」、「仏涅槃図」などを描き、それを糧（かて）にして、東海、中国地方の浄土寺院を訪ね、漂泊する生活でありました。

ところが文化元年（1804）に京都醍醐三宝院の門主の大峰入りのことを耳にした金谷はどうしても一緒に入峰したくなり、このころは名古屋を拠点に東海地方を旅していたのですが、門主とともに吉野、金峰、大峰、熊野と山伏のメッカをめぐる機会に会うことができます。そのころから金谷坊と名のり、画も山水画が中心となります。大峰入りは斧役という重い入峰斧を持して回峰したのですが、その功績により法印号と紫衣を門主より拝領することになります。それ以降は紫衣法印金谷と誇らしげに署名するようになります。

文人画家として金谷の本領は豪放な山水画にあります。大峰入りした金谷を高岳の霊気が招くのか、それ以後金谷は憑（つ）かれたように日本六十余州の高嶽大沢を跋渉して歩く旅に過ごすことが多くなります。全国を旅浪した旅の画人金谷も文政７年（1824）には故郷下笠の対岸にそびえる比叡山麓にあったと思われるまでの画房常楽房を建て、ここで生涯を終える10年を過します。

「汲清泉闘茗図」　６曲１双　紙本淡彩　横井金谷　筆（60歳代の制作）　150.8cm×361.0cm

「梅図」 紙本墨画　岡　笠山 筆　131.1cm×58.1cm

晩年の金谷は幼少のころから63歳まで多くを旅にあって蓄積した事柄を静かに内省し、絵筆を執る生活でした。その折にまた蕪村を強く内に感じ、再び蕪村作品を臨摸しています。旅のうちに画風を確立した金谷の画業については、アメリカ合衆国の研究者にも注目されるところとなっています。

近江の文人画家に金谷と同じく栗太郡生まれの岡笠山がいます。笠山については美術辞典などに蕪村の系統として、月渓、楳亭、金谷とともに記されています。ところがどんな人でどんな画を描いていたかについては良くわかりませんでした。一昨年、栗東歴史民俗博物館において開催された「岡笠山と横井金谷―栗太の文人画家」展には笠山の作品が14点展示されました。この作品群によって、ようやく岡笠山の画がどんなものであったのかがわかるようになったといってよいでしょう。それまでは岡笠山は同郷の金工家奥村菅(すが)次や四条派の画家大倉笠山と混同される状況でした。東海道筋目川立場に生まれ育った岡笠山については作品は少し明らかになったもののその生涯は未だよくわかりません。近江の文人画家の一人として今後の研究が待たれるところです。

近江の文人画家として、紀楳亭、長寿寺僧龍賀、横井金谷、岡笠山について見てきましたが、蕪村の当時の文人画界における影響力が大きかったとはいえ、近江の文人画がいずれも蕪村の系統からでているという事実も興味ある問題と思われます。　　（石丸　正運氏　提供）